

第18回 BELCA 賞決定

BELCAでは、このたび第18回BELCA賞の表彰物件（10物件）を以下の通り決定いたしましたので、お知らせいたします。

なお、表彰式は来る平成21年5月19日(火) 16時より、東京都中央区日本橋蛸殻町のロイヤルパークホテルにて開催いたします。

第18回 BELCA賞表彰物件（順不同）

ロングライフ部門

物件名	所在地	竣工年	用途	所有者	設計者	施工者	維持管理者
伊勢丹本店本館	東京都 新宿区	1933 (1986、93、 03、06改修)	百貨店	(株)伊勢丹	清水建設(株)一級建築士事務所	清水建設(株)	(株)伊勢丹ビル マネジメント サービス
東京カテドラル 聖マリア大聖堂	東京都 文京区	1964 (1985、97、 04、07改修)	教会堂・ 礼拝堂	宗教法人 カトリック 東京大司教区	(株)丹下都市建築設計 大成建設(株)一級建築士事務所(改修)	大成建設(株)	宗教法人 カトリック 東京大司教区
東京タワー	東京都 港区	1958	送信施設・ 観光施設	日本電波塔(株)	(株)日建設計 内藤多伸（設計指導）	(株)竹中工務店	日本電波塔(株)
ルポンドシエルビル (大林組旧本店ビル)	大阪市 中央区	1926 (2007改修)	レストラン・ 特定企業の 歴史博物館・ 各種学校 (改修前：各種学校)	大林不動産(株)	(株)大林組本店一級建築士事務所	(株)大林組	大林不動産(株)

ベストリフォーム部門

物件名	所在地	竣工年	改修年	用途		所有者	改修設計者	改修施工者
				改修前	改修後			
行幸地下通路 (丸の内駐車場)	東京都 千代田区	1960	2007	都市計画 駐車場	都市計画 駐車場・ 都市計画 通路	三菱地所(株)	(株)三菱地所設計	大成建設(株) (株)関電工 新菱冷熱工業(株) (株)城口研究所
静岡銀行 浜松営業部本館	浜松市 中区	1928	2007	銀行店舗	同左	(株)静岡銀行	(株)三菱地所設計 (設計監修・工事監理) 清水建設(株)名古屋支店 一級建築士事務所 (株)フィールドフォー・デザ インオフィス (インテリア設計協力) LIGHTDESIGN (照明設計協力)	清水建設(株) 川北電気工業(株) 日管(株)
大成建設 技術センター本館	横浜市 戸塚区	1979	2006	研究所	同左	大成建設(株)	大成建設(株)一級建築士事務所	大成建設(株) 大成設備(株)
綱町三井倶楽部	東京都 港区	1913	2006	社員クラブ (大食堂・ サロン・ 談話室等)	同左	三井不動産(株)	清水建設(株)一級建築士事務所 (株)フィールドフォー・デザ インオフィス	清水建設(株) 三井住友建設(株) 新日本空調(株) 東光電気工事(株)
東洋大学 朝霞校舎 実験工房棟	埼玉県 朝霞市	1979	2005	大学校舎 (研究棟)	大学校舎 (工房棟)	学校法人 東洋大学	(株)久米設計 + 内田祥士	鹿島建設(株)
松田平田設計 本社ビル	東京都 港区	本館： 1960 別館： 1981 新館： 1989	2006	事務所ビル	同左	(株)松田平田 設計	(株)松田平田設計	清水建設(株)、(株)関電工 新菱冷熱工業(株) 三建設備工業(株) 東邦レオ(株) (株)日比谷アメニス 田島ルーフィング(株)

BELCA賞の概要

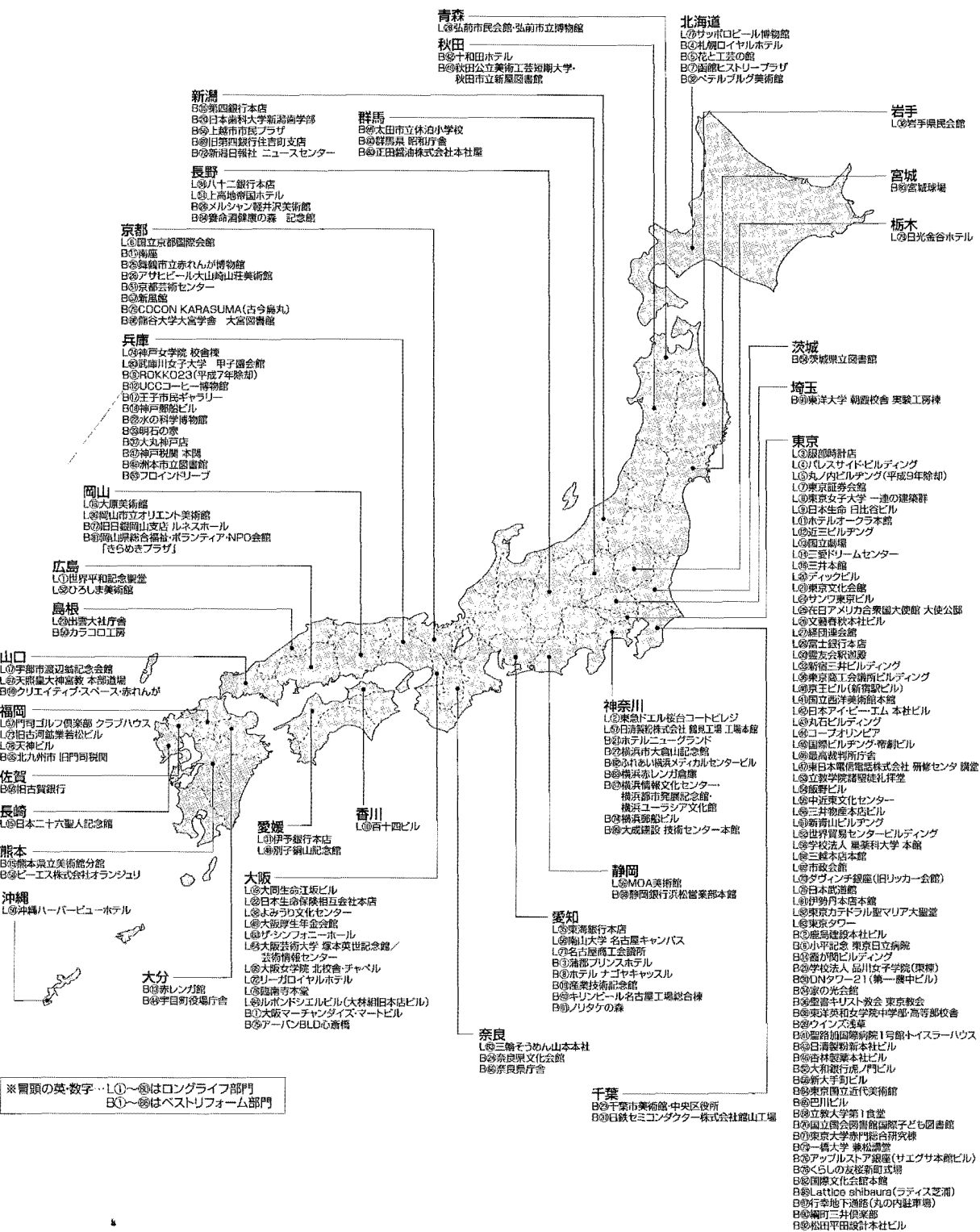
- 目 的** 適切な維持保全を実施したり、優れた改修を実施した既存の建築物のうち、特に優秀なもの
の関係者をロングライフ、ベストリフォームの2部門により表彰し、良好な建築ストックの
形成に寄与することを目的とします。
- 受賞件数** 今回を含め、これまでロングライフ部門84件、ベストリフォーム部門92件、合計176件が
BELCA賞を受賞しました。(前回までの表彰物件につきましては、次ページの地図をご参照
ください)
- 要 件** ロングライフ部門は長年にわたり適切な維持保全が実施され、建築後30年以上経過した建築
物のうち特に優秀なもの表彰し、ベストリフォーム部門は最近改修され、その改修により
画期的な活性化が図られ、改修後1年以上を経過した建築物のうち特に優秀なもの表彰し
ます。
- 選 考** 賞の選考は、学識経験者、建物所有、設計、建設、設備、メンテナンスといった多分野から
なる「BELCA賞選考委員会」(委員長：内田祥哉／東京大学名誉教授)により行われました。
- 表彰式** 表彰式は来る平成21年5月19日(火) 16時より、東京都中央区日
本橋蛸殻町のロイヤルパークホテルで開催されます。
- 受賞者** ロングライフ部門で建物所有者、設計者、施工者、維持管理者
の四者、ベストリフォーム部門で建物所有者、改修設計者、改
修施工者の三者が表彰されます。
なお、受賞物件には賞牌(文化勲章受章者／帖佐美行氏作)が
贈呈されます。



第18回(平成20年度)BELCA賞選考委員会(順不同・敬称略)

- | | | |
|------|--------|---------------------------------------|
| 委員長 | 内田 祥哉 | (東京大学名誉教授) |
| 副委員長 | 三井所 清典 | (株)アルセッド建築研究所 代表取締役・芝浦工業大学名誉教授) |
| 副委員長 | 鎌田 元康 | (神奈川大学工学部建築学科教授・東京大学名誉教授) |
| 委員 | 今浦 良夫 | (日本電設工業(株) 執行役員事業開発本部副本部長) |
| 〃 | 岩井 光男 | (三菱地所(株) 顧問) |
| 〃 | 江本 正和 | (株)松田平田設計 専務取締役業務統括室長兼情報管理室長) |
| 〃 | 尾崎 勝 | (鹿島建設(株) 執行役員建築設計本部長) |
| 〃 | 可児 才介 | (大成建設(株) 取締役専務) |
| 〃 | 倉田 昌典 | (高砂熱学工業(株)ファシリティ・サービス本部ファシリティ・サービス部長) |
| 〃 | 酒井 修 | (株)N T Tファシリティーズ FM事業本部技術部長) |
| 〃 | 細田 雅春 | (株)佐藤総合計画 代表取締役副社長) |

BELCA賞分布地図



第18回 BELCA賞選考総評

BELCA賞選考委員会 委員長 内田 祥哉

BELCA賞は、良好な建築ストック、つまり社会の中で生き生きと活用される建築の形成に寄与することを目的に設けられた賞である。賞を二部門に分け、周到な長期計画で、安定した維持保全を継続しているものをロングライフ、巧みな改修によって、嘗て活躍した建物を現代社会に蘇生させたものをベストリフォームとし、表彰件数は平成3年以来前回まで、166件に達している。

ロングライフ部門では、所有者、設計者、施工者、維持管理者の四者を、ベストリフォーム部門では、所有者、改修の設計者、施工者の三者を表彰しているが、地球環境問題にともなう建築物の長期利用の気運を背景に、BELCA賞への関心は年々高まりつつある。今回は、ロングライフ部門4件、ベストリフォーム部門6件、合わせて10件を表彰することになった。

今回表彰されるロングライフ部門には、戦前の百貨店と事務所を代表する建築と、戦後の日本建築界を代表する教会と鉄塔が選ばれた。いずれの物件も、竣功以来、関係者の深い愛情と不断の努力で現在まで活用されてきたものである。

ベストリフォーム部門では、公共通路、銀行、設計事務所ビル、研究所、社員クラブ、校舎と、多様な物件が選ばれた。今回のベストリフォーム部門の特徴は、基本的な用途を変更した物件がない点で、見方によればロングライフ部門としても不自然でない。用途変更が無いにもかかわらず、ベストリフォームに応募されたのは、耐震補強、設備の更新、性能のグレードアップなど、時代の要請を反映した改装や、性能の改善が、通常の維持管理、補修の域を超えているためであろう。すなわち、リフォームの過程ではデザインの歴史的復元、室内環境の試行的改善、床を抜く減築、中庭に架ける屋根など、抜本的改築技法が採り入れられている。

嘗ては、優れたデザインの耐震補強だけでも注目すべきリフォームとされたこともあった。だが、昨今はそれだけでは珍しくなく、それ以上の付加価値が、選考過程で求められるようになった。本年の応募物件は水準が高く、選考は、これまで以上に困難なものとなった。今後、此の方向の技術開発が、一層多角的になると、応募作品の水準も、ますます高まることが予想される。

BELCA賞も18回を重ね、各地への周知も広まっている。しかし未だ受賞物件のない県が15県あり、建物の維持保全技術を全国的に普及向上させようとする本賞の趣旨から、これら未だ受賞のない地域からの積極的応募が期待されている。

今回表彰される物件が、我が国の優良な建築ストック形成に寄与することを確信するとともに、建築物の維持保全に日夜努める関係者各位に対して、深い敬意を表したい。

第18回 BELCA賞ロングライフ部門選考講評

BELCA賞選考委員会 副委員長 鎌田 元康

第18回BELCA賞には、昨年度とほぼ同数の応募物件があったものの、ベストリフォーム部門の応募数が増える一方で、ロングライフ部門の応募数は減少した。しかし、表彰物件数が昨年と同数の4件であることが示すように、例年にもまして優れた物件揃いであったというのが、選考委員全員の感想であった。今回ロングライフ部門で選定された表彰物件のうち3件は、竣工当初より用途が変更されていないが、建設会社本店ビルからレストラン・歴史資料館・各種学校を含む複合用途ビルに用途変更された「ルポンドシエルビル」を含んでおり、ベストリフォーム部門とロングライフ部門の両者を厳密に区別することなく、両者合わせて10件を選ぶという選考方法が妥当なものとなっていることを、昨年と同様感じさせられた。今回の表彰物件は、年数が最も少ない「東京カテドラル聖マリア大聖堂」で竣工後約45年が経過しており、長期間にわたり、所有者、設計者、施工者および維持・管理に携わる方々が、各立場から真剣に建物を長く使うために努力され、また、所有者の方が、建物に強い愛着を持ち続けたことに対し、心から敬意を表したい。

「伊勢丹本店本館」(1933年竣工)は、1886年神田明神下で伊勢屋丹治呉服店として創業した「伊勢丹」が、新開地である新宿に百貨店として進出することになり建設した建物が元となり、その後隣接する建物の買収合併を行い、1965年までに14期に及ぶ増改修を行ったものである。1936年の外装改修によりほぼ現在の姿となったが、1986年には伊勢丹創業100周年事業の一環として、全館の外装全面改修を行い、耐久性と安全性に配慮し、高層部のテラコッタとタイル、スチールサッシュは、既存のテラコッタとタイルのイメージそのままにGRCパネルやアルミサッシュに置き換えながら、昭和初期のアー・デコ調のデザインとしての面影を残しつつ、近代化されたファサードとなったのが今日の姿である。2003年から5年にわたる全面的な耐震補強を行い、現行法規と同等の耐震性能をもたせていること、維持管理・保全に関しては、長期保全計画を作成し、増改築ごとに設備改修・更新が図られ、さまざまな省エネルギー・省資源化が図られていること、屋上での利用でも、単なる集客空間とすることなく、芝生広場や四季をテーマとした回遊式庭園などを積極的に取り入れ、都市緑化に貢献し、心地よい公共空間を生み出していることなどが評価された。

「東京カテドラル聖マリア大聖堂」(1964年竣工)は、数ある丹下建築の中でも代々木屋内総合競技場と並んで最高傑作とも評される建築である。竣工後21、32年目に続き行われた今回の43年目の大規模改修では、オリジナルデザインを踏襲しつつ、HP(双曲放物線)シェルのコンクリート劣化が内外部とも徐々にではあるが進行し、内壁でもわずかながらエフロレッセンスが生じ、また、竣工以来ほとんどノーメンテナンスだった外装ステンレスには腐食や捲れが生じ、下地鉄骨にも発錆が生じているという数々の問題に対し、RC躯体の防水対策を充分に施した上でステンレス板を全面貼替えるという万全を期した改修を行い、さらに応急処置が行われていたトップライトについてもシールによらない納まりのアルミトップライトを新設している。極めて難易度が高い外装改修工事を、専用の治具を製作するなど種々の工夫をして見事に成功させていること、電球切れ毎に足場を組まなければ交換できなかったトップライトの照明を昇降式の大型のものに換えていることなどの他に、今後計画されているバリアフリー化や、大聖堂と同時期に竣工した鐘楼の改修、献堂50周年を行う予定の構内再構築整備への準備など、所有者の熱意が高く評価された。

「東京タワー」(1958年竣工)は、内藤多仲の設計指導のもと建設され、現在でも自立鉄塔としては世界一の高さを誇る建物であるが、50年の間、東京のランドマークとして美しい姿を保ち続けていることが高く評価された。その裏では、多くの困難を伴った改修、維持・管理が行われている。2003年には、アナログ放送からデジタル放送へという時代の要請に応え、特別展望台上部鉄塔の地上250mに地上デジタルアンテナを増設、大展望台直下の地上100mの鉄塔内にデジタル送信機室を増設したが、建設時の総荷重3700tに新たに計600tもの荷重が高所に加わるといった難工事を、様々な技術を駆使し、24時間放送停止なし、かつ、電波塔本来の機能性と、現在の設計基準でも十分な安全性の両方を満足させる仕様で完了している。その他にも、塔体下部の低層棟(放送中継施設および観光施設)の耐震補強および内外装のリニューアル、大展望台へのエレベーター更新工事、発信電波に影響を与えぬよう丸太足場を組んで手塗りを実施している1965以降5年毎の塗装替え、施設運営システム導入による管理の高度化・効率化、1989年に一新したライトアップなど、地道な努力により、竣工以来年間300万人以上の来館者がある魅力ある施設であり続けている。

「ルポンドシエルビル(大林組旧本店ビル)」(1926年竣工)は、大林組の本店ビルとして建設された、当時、最先端であったスパニッシュスタイルの秀逸なデザインのビルである。1972年に大阪大林ビルが建設されたため、ビルの機能は企業本社からテナントビルに生まれ変わり、1981年以降は、2007年の大規模耐震補強工事を伴う改修工事まで、料理学校の校舎として使われてきた。今回の改修により、B1階～2階がこのビルの名前になったフレンチレストラン「ルポンドシエル」、3階が大林組歴史館、4階～6階までは従前どおりの料理学園の教室となった。個性豊かな外観を極力保存するため、外壁のデザインを損なわないよう耐震壁は既存窓の内側に設けるなど多くの工夫が見られること、室内スペースを損なうことなく、今後の長期使用に耐えうる設備改修が行われ、維持管理計画も極めて妥当なものであることなどが評価された。

第18回 BELCA賞ベストリフォーム部門選考講評

BELCA賞選考委員会 副委員長 三井所 清典

第18回BELCA賞ベストリフォーム部門は応募建物の用途の幅が広く、改修の要素技術も多様化し、精緻化している傾向が見られた。改修して建物を大切に使うという概念がますます広がっていると思える。受賞した事例をみると、近代建築初期のレンガ造の迎賓館、地域で初めてのRC造の銀行、昭和30年代中頃経済の高度成長初期の事務所と駐車施設、昭和50年代オイルショック直後の民間技術研究所、大学の文科系研究施設など建設の背景も用途も同じものはない。耐震補強の技術や環境配慮の技術もさまざまで、研究開発技術が実を結んできていると思われる。また、デザインを含め全体にリフォーム設計の優れたものが多かったという印象が深い。

「行幸地下通路」（1960年竣工、2007年改修）は皇居と東京駅正面を結ぶ行幸道路の地下1階に実現した都市計画通路で、周辺のビルとも接続する自由通路である。従来は駐車場だったところで、地下2階は現在も駐車場として機能している。通路の両側には展示スペースが設けられ、地上と結ぶ階段やトップライト、並木根鉢などを活用して耐震補強も巧みに実現している。朝夕の雰囲気演出の照明や環境配慮型空調など設備計画も優れ、公共的都市施設と建築が一体となった丸の内中心地区のすぐれた都市整備である。

「静岡銀行浜松営業部本館」（1928年竣工、2007年改修）は、静岡で初めてのRC造の遠州銀行本店として建設され、長く市民に愛されてきた建物で、現在は浜松市指定文化財になっている。この改修の特質は旧館の中央吹抜け部分を来客ロビーに、周囲の天井の低い部分を営業事務スペースに変えたことと、新館との接合部に4階吹抜けの新しいロビーを設けたことである。建物に入った人々はこの仕組みによって旧館の内外をゆっくり楽しむことができる。旧館の設備を目立たなくした空調の成功もこの二つの特質を巧みに活かしたすぐれた改修設計によるものである。

「大成建設 技術センター本館」（1979年竣工、2006年改修）は主として研究者のデスクワークと本部機能をもつ建物で、今日的要請の機能向上を総合的に実現した改修である。特徴は専門分野別に孤立しがちなところを中心部に吹抜けを設け、視覚的心的交換を日常化し、研究者の交流を促進することに成功していること、自ら研究開発してきた耐震補強・環境配慮の諸々の技術を集中的に適用しモデル化していること、これらの統合が洗練された空間としてまとめられていることで、改修として高く評価される。

「綱町三井倶楽部」（1913年竣工、2006年改修）はJ.コンドル設計の20世紀初頭の代表的建築で、建物を将来に亘って保存活用するため今回の大改修が行われた。特徴はレンガ造の上部躯体への地震入力を低く抑えるため1階床版と基礎梁を補強し基礎免震技術を用いたこと、往時の写真や図面を綿密に調査しオリジナル空間を復元したこと、今日の迎賓館にふさわしい施設にすべく設備計画にも工夫を凝らしたこと、さらにこの改修を建物を使用しながら部分的に少しずつ実施する工事上の難題を克服したことで改修設計と改修工事のレベルが極めて高いと評価される。

「東洋大学朝霞校舎実験工房棟」（1979年竣工、2005年改修）は旧文化系研究室棟を新学部、新学科の工学・デザイン系教場として再生した好例である。特徴は堅牢なRC間仕切り壁で細かく区画された空間を少人数教育のスタジオとする教育ソフトを対応させて活用していること、中庭に屋根を架け、実験・制作、議論・講評の場として3層全体をまとめるアトリウム空間を実現していること、各所に手づくり感覚のある仕上げや細工を施し、すべてを教材化、教具化していることである。実習施設としてソフトとハードを見事に調整し、再生した秀作である。

「松田平田設計本社ビル」（1960年竣工、81・89年増築、2006年改修）は創建当時の時代背景の中で実現した階高の厳しい（2.9m）事務所棟とそれに合わせて増築された全3棟をまとめて再生した好例である。特徴は既存の棟の位置や高さの違いを活かしながら中心部に横ずらし3層吹抜けを床を抜く減築という手法で実現し、全体に開放感を創出したこと、自然光の採り入れ、自然換気、屋上緑化、断熱性向上、省エネ機器の採用、耐震補強など各所に環境配慮の要素技術を駆使し、これらを巧みに統合したことである。昭和30年代の建築を取り壊さず、今後50年の継続利用を目指して改修された秀作である。